

人間学 2 「北東アジア環境共生プロジェクト」 報告

申 珠莉*

はじめに

日本・韓国・中国という北東アジアの3カ国は、その地理的近接性や経済的結びつき、さらには人的交流の活性化などに伴う環境共同体としての共通認識が求められる隣国同士である。この場合の「環境」とは、大気やエネルギーなどの物理的環境を指すのみでなく、産業化や経済発展に伴う都市環境、少子高齢化と社会保障変化に伴う社会環境、再開発や街づくりに活かされている文化的環境など、その定義は多岐にわたっている。

2018年度の人間学2では、韓国ソウル研修を通じて、こうした様々な環境共同体としての韓国の諸側面を視察・体験し、また交流を図る活動を9月の10～15日までの5泊6日にわたって実施した。事前の準備として、計3回の事前授業を行い、学生たち自らが環境というキーワードに沿った計画を立て、事前調査に基づく日程を組むなどの自主的参加を促した。その結果、研修現場では効率的な時間管理やスケジュールの履行が可能となるなど、学生らの積極的な参

日付	研修日程	内容
9/10	自由研究テーマのプレゼン	各自の専門を踏まえた研究
9/11	韓国集合住宅の再開発 国民大学特別講義	再開発地区のサーベイ チャン・ジュンシク教授の講義 「デジタル時代のデザイン」
9/12	清溪川・ソウル中心部視察 環境デザイン事務所訪問	ソウル都心の環境デザインと 再開発事業
9/13	梨花女子大学訪問	環境色彩デザイン講義とプロセス視察
9/14	自由研究日	旧都心・韓国伝統文化の理解 新都心・江南地区など
9/15	自由研究の中間報告	まとめ

受理日2018年11月28日

*教養学部芸術学科教授 「北東アジア環境共生プロジェクト」18年度の担当者は鳥飼行博、申珠莉の2名。

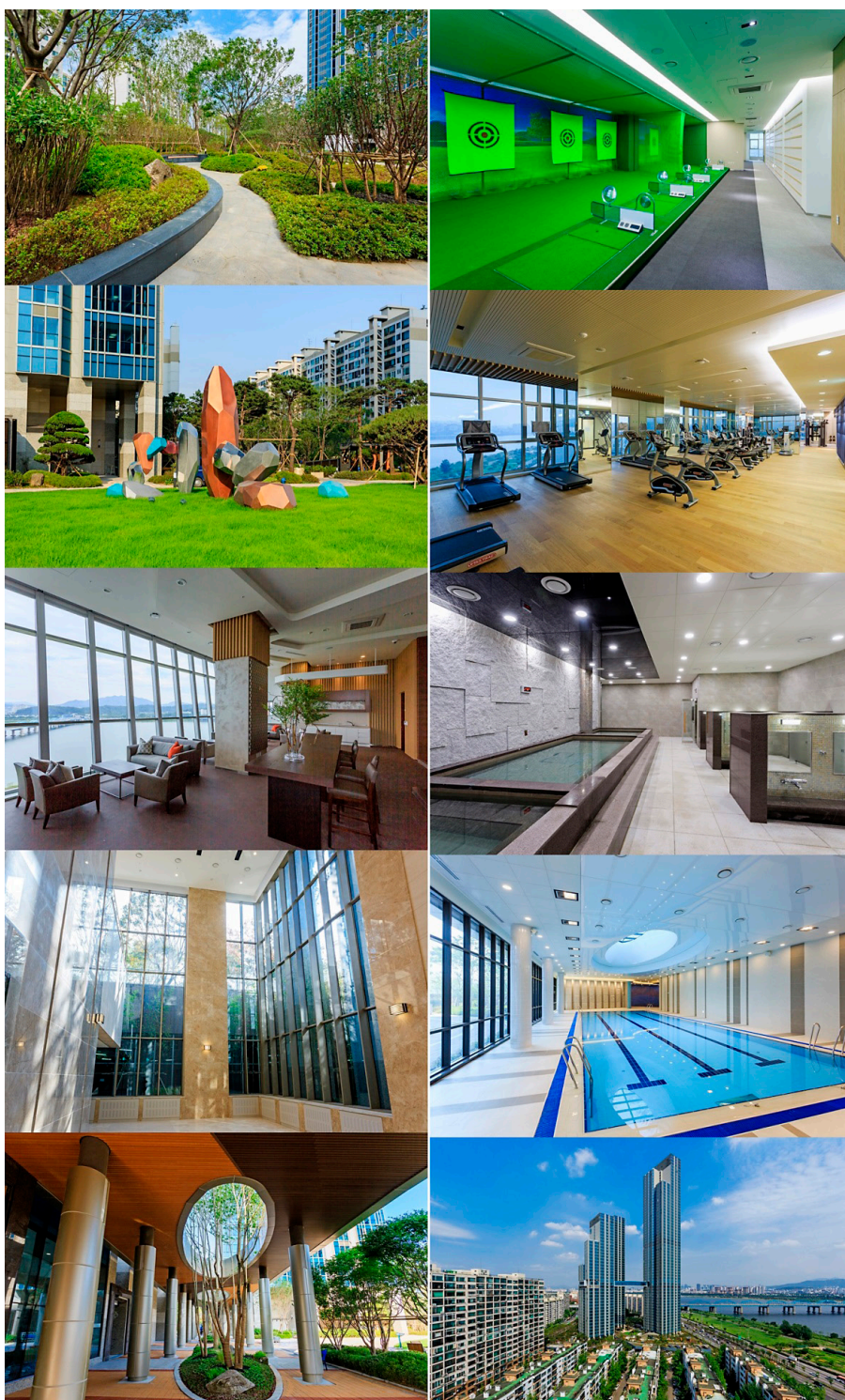


写真1 集合住宅団地 Caelitus Club RAEMIAN CLOUD

加姿勢は研修の成果にも極めて肯定的な影響があるものと判断される。具体的な研修日程および主な内容は以下の通りである。

1. ソウルの集合住宅の再開発の現状

ソウルは集合住宅団地の林立し圧倒する特有の都市景観をその特徴とする。そして築後40～50年を迎えた老朽化した集合住宅の再建築が盛んに行われ、これらに関わる様々な問題が露出している。住環境に関わるケーススタディとして、2011年再開発が開始され、2015年7月に完成、同年8月1日に入居した、3棟の最高56階、最低36層の Cælitus チェリトゥスにて、特に集合住宅の要である共用共有部分のあり方にフォーカスを当てたサーベイを実施した。

17階コミュニティセンターの Club RAEMIAN CLOUD は、各棟をつなぐ長さ43mの鉄骨構造物であるスカイブリッジに接続されており、漢江眺望の特権をさらに享受することができようにしたことが大きな特徴である。ここに入居者のためのコミュニティー施設が設置されている。ロッカールームを備えた101棟には、入居者のためのカフェやフィットネスセンターが、102棟には図書館、会議室、多目的室、およびゲストハウスが、103棟にはゴルフ練習場、スクリーンゴルフ、読書室が設置されている。生活支援センター、ラウンジカフェ、ブックカフェがあり、運営されている。

1階 Club RAEMIAN は、入居者のためのコミュニティー施設。ここには、男女サウナ、プール、キッズルーム、シニアルームが配置されている。男女サウナは1階管理棟にあり、水遊びをすることができるプールがあり、子供たちが遊ぶことができるキッズルームがあり、シニアルームがある。

最先端の集まって住む形として、コミュニティーと環境問題を重要視する共用共有部分のあり方についてパラダイムシフトしている現場をサーベイであった。

2. 国民大学特別講義

国民大学のチャン・ジュンシク教授の「デジタル時代のデザイン」デジタルがキーとなる情報化時代のデザインとはどのようなものであるべきかについての特別講義は、大変興味深いものであった。今日のデザイン方法の底流をなす、システムティックなデザイン方法は、情報を細分化し、再構成することに重点を置いた、アナリシスを中心とした方法である。しかしデジタルにおいては、「何を」デザインするかが問題となり、そのため、新たな方法の要件として、物理的環境と同時に、社会的・文化的環境を含めた相互関連の考察と、総体的把握をすることの大切さが問われる。さらに、コミュニケーションの在り方といった精神的目的へと考察範囲を広げ、デザイン主体の価値明示的な「視点のまとめあげ」が必要となる デザイナーの現状と、未来に対する考えなど有意義な意見交換を通じてお互いを分かり合えるキッカケづくりとなった。

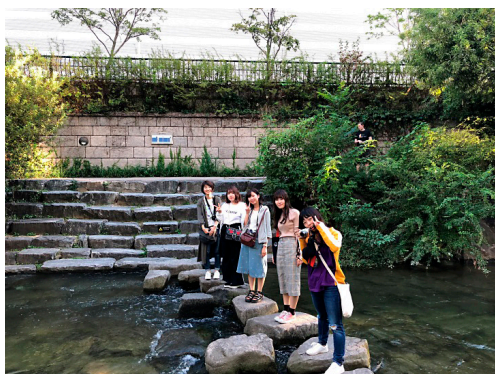


写真2 清溪川復元事業



写真3 北村・旧と新市街地の混在する都市ソウル

3. ソウル中心部環境デザイン視察・伝統と現代の共存に向け

ソウルの政治・経済・文化の中心地である明洞を起点に、ソウル市庁や光化門広場、北村など旧市街地のサーベを行った。

まず、ソウル市における清溪川再開発跡地を中心とする都市整備の様子を視察した。

ソウルの代表的な故宮である「景福宮」を視察した。政治の場として建立された景福宮と民俗博物館を訪問し、朝鮮時代の生活に対する考え方や様子などが理解できる体験となった。朝鮮時代の正宮である、景福宮と昌徳宮、宗廟に囲まれた「北村韓屋村」は、朝鮮時代（1392～1910）から残る韓国の伝統家屋「韓屋」が密集するエリア。朝鮮時代に王族や両班と呼ばれた当時の貴族たちが住んでいた、歴史の面影を色濃く残している地域であるが、近年、地下鉄3号線安国駅の北側に広がる齋洞、桂洞、嘉会洞には、1点ものの作品が並ぶ個性的なショップや、ほっこりくつろげるおしゃれなカフェなどが立ち並び、歴史と現代が共存するこのエリアとなっている。伝統というありようを現代における見え方、見せ方を改めて考えることの大切さを実感することができた。

4. 韓国における環境デザインの今

『環境デザイン』というテーマで、KHSDESIGNでは、環境デザインのプロセスについてさまざまな事例を通して、社会的問題への解決策としての環境デザインの取り組みについて体験体感することができた。サービスデザイン技法を用いる公共デザインや、デザインプロセスの一部として防犯に焦点を当て、人の活動を促進するデザインによる防犯手法を提示することで、より安心安全な都市生活環境づくりに貢献することを目的とし、防犯まちづくりの方向性などのさまざまな環境デザインの実例などをプレゼンしていただいた。

ヒト・モノ・バの関係づくりに加え、トキとコトづくりの概念が加わった最新の概念を示してもらいました。

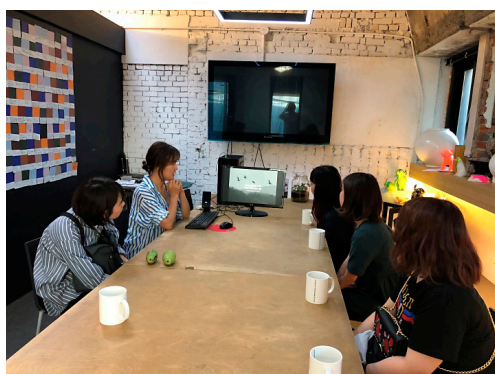


写真4 KHSDESIGN の環境デザイン事例研究会



写真5 梨花女子大学色彩研究所・環境色彩計画講義

5. 梨花女子大学色彩研究所の環境色彩計画講義

色彩関連施設や機器と色彩情報ライブラリを構築しており、これをベースに色彩デザイン専門人材養成事業や国内外の色彩関連のセミナー、色彩教材の開発、産業色彩技術サポート、色彩デザイン関連プロジェクト（環境色彩、製品の色彩、映像色彩など）の実行などを主な内容として、韓国内初の色彩専門研究機関として活動している梨花女子大学色彩研究所では、デザインの決定的要素である色彩に対する科学的研究の現場を当研究所の専門家からの詳細な説明を通じて体験できたのみならず、質疑応答の時間を通じて日頃の疑問に対する知識や情報を得ることができた。

さらに、ECC（Ewha Campus Center）などキャンパス環境デザインに関するサーベイも行った。

おわりに

本年度における「北東アジア環境共生プロジェクト」のソウル研修は、環境問題へのさまざまな取り組みをベースに環境デザインにおいて日韓の現在と未来のあるべき姿を見出すことがテーマであった。また、そのために現地での特別講義や交流会などを通じて、日韓両国が抱える共通の課題を認識しながら、自ら積極的にコミュニケーションを図り、理解しようとする学生たちの姿勢を導き出すことができたのが本研修の最大の成果と考える。

日本とは異なる国のあり方を論理で理解するという限界を超えて、その物理的制約を取り払った直接体験を通じて身に付けた知識や認識、そして感性は、急変する北東アジア社会の未来を担う若者世代に対して、日本の大学教育が継続的に提供していくべき体験学習の貴重な場でもある。その意味で、北東アジア環境共同体という切り口から、学際的なアプローチに基づく体験を可能にしている本プロジェクトは、今後においてもその内容を充実させながら、今後においてもその成果と意義を継続させるためのさらなる努力が必要であると感じている。